

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：34416

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23650378

研究課題名(和文) スポーツを核とした文化的アプローチによる感性理論の体系化の試み

研究課題名(英文) Systematization of Kansei Theory by cultural approach with a focus on sports

研究代表者

志岐 幸子 (Shiki, Yukiko)

関西大学・人間健康学部・准教授

研究者番号：80554518

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、一部のスポーツと芸術において一流とされる人々の感性とゾーンについて、インタビュー調査を実施し、主に 感性の捉え方、ベストパフォーマンスを生み出したときとその前後の感性状況や心身の状態、ベストパフォーマンス時の周囲の状況、感性を磨いたと考えられる習慣、ベストパフォーマンス直前の行動について調べた。これらの共通性を見出した結果、スポーツと芸術には共通するゾーンの特性が多く見られ、さらにゾーンに入るために必要な条件について心理学や鈴木大拙の禅の思想などの東洋思想、脳科学の観点から検討した。本研究の結果から、先行研究における感性理論を強化し、感性をより明確に定義した。

研究成果の概要(英文)：The present study examined Kansei of leading artists and top athletes and some zone experiences that they felt. The interview questions were as follows:

1. What is Kansei? 2. How did you feel about your Kansei and your mind and body before, during and after your best performance? 3. How did you feel about the surroundings and situation around you when you performed the best? 4. What kind of habit or other has developed your Kansei and has had a good influence on it? 5. What did you do before you demonstrated your most successful performance? The characteristics of the zone in sports and the arts are compared. As a result, it is found that a lot of commonality in "the sports zone" and "the arts zone" exists. These results were discussed in the standpoint of psychology, oriental thought, and brain science. Therefore, some effective methods and conditions necessary for entering the zone are presented. The definition of Kansei was clarified in detail and the Kansei theory was enhanced.

研究分野：スポーツ感性学、感性学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、身体教育学

キーワード：感性 ゾーン スポーツ 感性の定義 芸術 スポーツ感性 感性理論 ベストパフォーマンス

### 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の社会は、クローン化や IT 化の著しい進行、少年犯罪の凶悪化、麻薬汚染の拡大、虐待の深刻化、多様なメディアによる子どもへの悪影響、環境問題、高齢化社会等の社会的問題が山積しており、人間性の回復が各方面より叫ばれていた。さらには、携帯電話の急速な普及も手伝い、マナーやモラルの低下など、日本人が古来備えていた美意識が損なわれている面も、日常の場に数多く見受けられ、現代人の感性への危機感が広がっていた。

このような社会情勢の中で、20 世紀の科学技術の向上やモノ偏重主義の弊害に対する反省から、21 世紀は人間的な感性に目を向ける時代とされ、「21 世紀は感性の時代」と言われていた。既存の学問領域のみならずビジネス界も含め、各分野で「感性」へのアプローチが開始されていた。

しかしながら、感性研究の核となるべき「感性」の定義については、それまで多くの見解が公表されていたものの、その学術的定義は未だ統一されておらず、理論化についても不十分と言わざるを得ない状況であった。多くの人々が、その人生を豊かに過ごしたり、各分野で最適な状況（ベストパフォーマンス）を生み出したりするために必要な「感性を磨き豊かにする方法」を模索していたものの、その具体的方策についても、個人の経験談として参考程度に語られることが殆どであり、学術的に体系化されたものは存在していなかった。そのため、学術的な立場でその疑問に答え、個人や社会の幸福に貢献することが早急に求められていた。

以上のことから、日本人が古来培ってきた美意識を基盤とする日本人特有の「感性」(KANSEI)について学術的定義を明確にし、日本人の感性の回復の指針となる感性理論を確立する必要がある。

また、本研究の成果を広く社会に伝えることにより、社会全体の美意識の変容によるマナーやモラルの向上、犯罪の減少、各分野における日本人の活躍のみならず、環境問題への意識の向上や高齢者の精神的安定などを含む、人の心身や環境に種々の好影響をもたらすことが期待された。

### 2. 研究の目的

本研究は、各分野における「感性」の捉え方と「感性」が最大限に働き優れたパフォーマンスを生み出す際の感性状況およびその「感性」の養い方について調査し、その共通性を見出すことにより、感性を再定義し「感性」を磨き豊かにするために有効な対策を提示すべく、感性理論の体系化に向けてその基盤作りを行うことを目的とした。

### 3. 研究の方法

(1)研究代表者(志岐幸子)の先行研究である博士論文(エリートジュニアサッカー選手の心理特性 アスリートの感性研究へのアプローチ、2003、早稲田大学大学院人間科学研究科)や著書(岡田武史監督と考えた「スポーツと感性」、2008、日本経済新聞出版社)において試みた感性の定義や感性に纏わる理論を踏まえ、「感性」に強い関心を持つと考えられる、種々の分野で活躍する一流の人々へのインタビュー調査を中心とした事例研究および文献調査を実施し、それらの分析と考察を行った。

(2)調査対象者は、スポーツはバドミントン、飛び込み、テコンドー、棒高跳びの各競技において五輪もしくは世界選手権で活躍したトップアスリートを中心とし、芸術は版画制作や織物制作、舞踏において国内外において活躍し、様々な賞を受賞した一流の人々とした。その他、所属機関等における各競技のアスリートとの対話や、研究代表

者が参加したシンポジウムおよび連載を行っているスポーツ誌において対談した野球、アメリカン・フットボール、空手、バトミントン、短距離走、サッカー、チーアリーダーディング等のスポーツ指導者の談話も参考とした。

(3) インタビュー調査の主たる内容は、各分野における感性の捉え方、ベストパフォーマンスを生み出したときとその前後の感性状況や心身の状態、ベストパフォーマンス時の周囲の状況、感性を磨いたと考えられる習慣や取り組み、ベストパフォーマンス直前の行動、ゾーン体験がある場合はその内容の詳細の6点であった。

(4) 本調査によって、収集したゾーン体験の事例は、先行研究を参照しながら、感性とゾーンの特性に従って分類され、スポーツ感性と芸術感性の比較がなされた。

また、感性研究は、あらゆる分野の知見を取り入れる必要があり、スポーツや芸術の他、特にユング心理学やマズローの人間性心理学、禅や「気」の概念や宗教観などの東洋思想、脳科学など多様な分野の視点・知識の融合が不可欠であったことから、文献については、早稲田大学・関西大学両施設を中心とした各分野の文献調査の他、信頼できる各種メディアによる調査を実施した。

「感性」の定義や役割、働き、仕組みの理論化については、感性学の始まりとされる「美学」(松尾大、1986、玉川大学出版会:「Aesthetica」Baumgarten、1750)、「感性論」(岩城見一、2001、昭和堂)の他、筑波大学感性評価構造モデル構築特別プロジェクト研究報告集、芸術書等も参照にした。

以上のインタビュー調査による事例収集と文献調査により、感性を磨き豊かにする

方策を見出すべく、感性理論の体系化を試みた。

#### 4. 研究成果

本研究の結果、以下の成果が得られた。

(1) 「感性」の実像をより詳細に明らし、言語と図を用いて理論的に説明を可能にしたことから、「感性」の明確な学術的定義を提示した。

(2) 各分野に共通する感性を磨く方策や有効な環境条件を、理論に基づいて一部提示することができた。

(3) これまで学術的根拠に乏しかった「感性を磨く具体的方法」の一部について、論理的説明を可能にした。

(4) スポーツにおけるゾーン体験と同様の体験内容が芸術においても多数認められ、芸術にも「ゾーン」と呼ぶべき領域が存在する可能性を示した。

(5) 感性と知性・霊性の関係性を論理的に説明し、感性の役割を明確にした。

(6) 感性が最大限に機能していると思われる、一部のスポーツと芸術においてベストパフォーマンスが生まれる際には、心理学的には先行研究と同様、意識と無意識の統合がなされていること、脳科学的には修道女が祈りを捧げている際に認められている方向定位連合野の活動および能楽師が「無我の境地」に入った際に確認されたという前頭葉の活動が抑制されていることが推測され、心理学・脳科学・東洋思想の観点から、感性の機能と各分野においてベストパフォーマンスを発揮するゾーンについて、論理的説明を可能にした。

以上の研究成果は、国内における論文やスポーツ雑誌のみならず、海外の学会においても招待講演や学会発表、論文発表等でも公開することで、感性とは一見対極的に見られる日本人工知能学会やアメリカ人工知能学会に関わる人々にも、感性の重要性を認識して頂く機会を得た。

また、ゾーンを経験していながら、その経験の意義や仕組みを理解していなかったアスリートたちに対しても、論理的説明を可能にし、スポーツに取り組む意義を再認識することに貢献したと思われる。2012年の五輪を境に五輪選手を中心としたトップアスリートが特にメディアで「ゾーン」を語る姿も時折見られるようになっており、今後ますますゾーンの意義や、ゾーン体験に不可欠な感性のあり方についての研究が進み、スポーツ以外の分野でも人間の心身の幸福や健康に寄与する感性とゾーンの解明が深化することが期待される。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計19件)

1. 志岐幸子、版画制作の観点から考える「感性」の定義と役割 版画家名嘉睦稔氏へのインタビュー調査を基に、身体運動文化論改、査読有、2014 発行予定(印刷中)

2. 志岐幸子、スポーツ感性学第10回「『ゾーン』の神秘性と『オーラ』」、コーチング・クリニック7月号、査読無、2014、ベースボール・マガジン社、52-55

3. 志岐幸子、スポーツ感性学第9回「ゾーンに入る仕組み」、コーチング・クリニック6月号、査読無、2014、ベースボール・マガジン社、44-47

4. 志岐幸子、スポーツ感性学第8回「ゾーンの特性とフロー体験」、コーチング・クリニック5月号、査読無、2014、ベースボール・マガジン社、44-47

5. 小島智子・志岐幸子述、コーチング・クリニック編集部編集、スポーツ感性学第7回

小島智子さんに聞く『スポーツ感性』と『ゾーン』 (インタビュー・校閲のみ担当)、コーチング・クリニック4月号、査読無、2014、ベースボール・マガジン社、44-47

6. 小島智子・志岐幸子述、コーチング・クリニック編集部編集、スポーツ感性学第6回「小島智子さんに聞く『スポーツ感性』と『ゾーン』」、コーチング・クリニック3月号、査読無、2014、ベースボール・マガジン社、42-45 (インタビュー・校閲のみ担当)

7. 志岐幸子、スポーツ感性学第5回「『スポーツ感性』の側面と『ゾーン』」、コーチング・クリニック2月号、査読無、2014、ベースボール・マガジン社、42-46

8. 志岐幸子、スポーツ感性学第4回「トップアスリートが考える感性」、コーチング・クリニック1月号、査読無、2014、ベースボール・マガジン社、44-47

9. 志岐幸子、トップパフォーマー達の「ゾーン体験」に見る「感性」の再考、人工知能学会誌、査読無、第28巻第6号、2013、862-871

10. 志岐幸子、スポーツ感性学第3回「トップアスリートの感性～全体観」、コーチング・クリニック12月号、査読無、2013、ベースボール・マガジン社、46-49

11. 志岐幸子、スポーツ感性学第2回「スポーツと『感性』の関係」、コーチング・クリニック11月号、査読無、2013、ベースボール・マガジン社、44-47

12. 志岐幸子・福林徹(2013)いわゆる「ゾーン」における感性的体験に関する一見解-オーラの観点からの検討-、トランスパーソナル心理学/精神医学、査読無、第13巻1号、114-130

13. 志岐幸子、スポーツ感性学第1回「スポーツにおける『感性学』の必要性」、コーチング・クリニック10月号、査読無、2013、ベースボール・マガジン社、42-45

14. 島岡健太・志岐幸子述、コーチング・クリニック編集部編集、「緊急考察シリーズ(4)スポーツと体罰 対談<後編>」、コーチング・クリニック9月号、査読無、2013、ベースボール・マガジン社、28-31 (インタビュー・校閲のみ担当)

15. 島岡健太・志岐幸子述、コーチング・クリニック編集部編集、「緊急考察シリーズ(3)スポーツと体罰 対談<前編>」、コーチング・クリニック8月号、査読無、2013、ベー

スポーツ・マガジン社、30-33 (インタビュー・校閲のみ担当)

16. 志岐幸子、「緊急考察シリーズ 識者に聞く(2)スポーツと体罰」、コーチング・クリニック 6月号、査読無、2013、ベースボール・マガジン社、30-33

17. Yukiko Shiki, Toru Fukubayashi, A Study on the "Zone Experience" of Leading Artists Through Kansei Analysis 2013 AAAI Spring Symposium Technical Reports, Association for the Advancement of Artificial Intelligence, 抄録にて査読有, 2013, 71-77,  
<http://www.aaai.org/ocs/index.php/SSS/SSS13/paper/view/5760/5958>

18. Yukiko Shiki, Collective Views of the Workings and Significance of Experiences, 2012 AAAI Spring Symposium Technical Reports, Association for the Advancement of Artificial Intelligence, 査読無, 2012, 48-53,  
<http://www.aaai.org/ocs/index.php/SSS/SSS12/paper/view/4304/4680>

19. 志岐幸子、文化的アプローチによる「深い感性」に関する一見解 ゾーン体験の観点から、人間健康学研究、査読無、第4号、2012、51-59

〔学会発表〕(計2件)

1. Yukiko Shiki, Toru Fukubayashi, A Study on the "Zone Experience" of Leading Artists Through Kansei Analysis 2013 AAAI Spring Symposium Technical Reports, Association for the Advancement of Artificial Intelligence, 2013, 71-77 (論文17), Stanford University, 2013/3/25

2. Yukiko Shiki, Collective Views of the Workings and Significance of Experiences, 2012 AAAI Spring Symposium Technical Reports, Association for the Advancement of Artificial Intelligence, 2012, 48-53 (論文18、招待講演), Stanford University, 2012/3/27

〔図書〕(計1件)

志岐幸子、祥伝社、一流人たちの感性が教えてくれた「ゾーン」の法則 至福の時に手に入れる14カ条、2012、243

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：

種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織  
(1)研究代表者  
志岐 幸子 (Shiki, Yukiko)  
関西大学・人間健康学部・准教授  
研究者番号：80554518

(2)研究分担者  
( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
( )

研究者番号：